

史料紹介

『藤堂御家譜并雑書』(一)

はじめに

ここに紹介する史料は、樋田清砂氏所蔵『藤堂御家譜并雑書』である。

本史料は、『三重県史 資料編近世1』(一九九四年、五八五～五八八頁)に「藤堂高虎大坂冬の陣人数割の覚」として一部翻刻されており、前半部分の欠損により、「藤堂家に関する記録(無表題の冊子)」という仮題が付されている。

二〇〇三年度に、三重大学歴史研究会学生会ならびに本古文書の会が上野市立図書館(当時)所蔵史料を調査した際に、ほぼ同内容の史料を確認したが、その外題は「藤堂家譜」、内題は「藤堂御家譜并雑書」となっていた。

そこで、本史料名を『藤堂御家譜并雑書』として、逐次翻刻してゆくことにしたい。詳しい解説は、本史料および関連史料(前欠部分)の翻刻完了時に付す予定である。

この読解にあたった古文書の会の構成員は、以下の通りである(*を付した者が入力・校正を行った)。

藤田達生*、久志本英男*、萩原淳也、木下武一、永田智子*、太

三重大学歴史研究会例会古文書の会

田光俊*、林希代美*、小林宗高、正入木紗絵子、安藤仁美、南川啓、斎藤隼人*、山下潤子、田島朋枝、三浦理沙、

〔付記〕

樋田清砂氏、鈴木えりも氏、角舍利氏、中川豊氏、伊賀市立図書館、三重県史編纂グループ(順不同)には、大変お世話になった。ここに記して感謝の意をあらわしたい。

凡例

一、文字の誤脱・人名・年次などに関する編者の傍注には()を用いた。特に、文意の通じない個所には(ママ)と表記した。なお「藤堂御家譜并雑書」(伊賀市立図書館所蔵)、上野古文献刊行会『宗国史』上・下(同朋舎、一九七九・一九八一年)、同『高山公実録』上、下(清文堂、一九九八年)、同『公室年譜略』(清文堂、二〇〇二年)、「藤家輯成秘考」(津市図書館橋本文庫蔵)などを参考とした。

一、人名の傍注には、前掲の諸書と佐伯朗『藤堂高虎家臣人名辞典』(私家版、一九九四年、三重県立図書館架蔵)、『藤堂藩諸士軍功録』(三重県郷土資料刊行会、一九八五年)などを利用し、通称を便宜

的に付した。これらの厳密な考証は、今後の課題である。なお徳川家康、同秀忠、豊臣秀吉、同秀頼、藤堂高虎、同高次に關しては、傍注を一部省略した。

一、樋田清砂氏所藏本に付された書写者による注記は、特に區別して「」で表記した。

一、原本に塗沫のある場合は々々を、その文字の左傍に付した。

一、原本の摩滅、虫損などによって文字が判読し難い場合には、字数を推定して、□□で示し、字数が推定できない場合には、「」で示した。

一、漢字は、原則として常用の漢字を使用し、ひらがな、カタカナはそのまま表記した。変体がなはひらがなに改めた。ただし江(え)・而(て)・之(の)・者(は)は残した。

(前欠)

人江被仰付候条、任誓詞而惣様働等之儀、日記を相付候而善惡共見隠不聞隠日々可令注進事、

一、諸事高麗二而の様体六人より御注進申上儀、可為正意旨被仰付候間、其旨儀存候、たとへ雖為縁者・親類無最肩偏頗有様二可注進事、
一、先手働等之儀、以相談之上多分に付随へし、拔懸為一人・式人申敗候ハ可為曲事事、

一、何方に於ても野陣たるへき事、

一、赤国不殘悉一遍二成敗申付、青国の其外之儀ハ、可成程可相働事、
一、船手之働入候時分、藤堂佐渡守・加藤左馬助・脇坂中務少輔兩三人申次第二、四国衆菅平右衛門并諸手警固之船共可相働事、

一、右働相済上を以、仕置城々所柄之儀兵の見及多少に付城主を定、即普請等之儀為婦朝衆令割符丈夫二可申付事、

一、右六人之者共七枚起請を被指書、諸事有様之体可申上旨被仰付候条、忠功之者ハ可被加御褒美、自然背御法度族有之ハ、右六人申次第不寄誰 八幡大菩薩可被加御成敗条、得其意不可有油断事、

一、自然大明国の者共、朝鮮の都より五日路も六日路も大軍にて罷出陣取於てハ、各令談合無用捨可令注進、御馬廻り迄にて一騎懸りに被成、御渡海即時に被討果、大明国迄可被仰付事案之内二候条、於油断ハ可為越度事、以上、

慶長三年二月廿二日 秀吉公御朱印

藤堂佐渡守とのへ

一、同年夏の比より秀吉公御不例日々御衰弱、御病痾重なり上下悲嘆の時、七月十六日何となく伏見中右往左往に騒動有之、是ハ家康公の

權威を石田三成嫉妬之心裏より発る故也、此節ハ高虎公伏見藤森に家康公御宮宅へ御見廻、折節家康公兵器を改御覽ある此砌之儀、御信実之御来儀と被仰、不淺御感之御挨拶と也、就中無何靜語也、

一、同八月十三日御違例次第く指重り薨御、御嫡男秀頼公七歳に被為成給御遺命あり、他界の後先仰有隱密淺野長政・石田三成・藤堂高虎此三人を早々筑紫へ下し、朝鮮を日本へ相隨へ大唐の手指を可

相止、日本の兵士異国之為枯骨事不便也、三人之者共以計略無恙朝鮮の人数早々可引取、其以後諸人に軍勞の功を可申定と也、右三人筑前に到朝家台より先以使俗朝鮮に遣、秀吉公之薨去を告る、諸將高虎公ハ家康公別して貴命あり、朝鮮に行渡同時勢依之高虎公御渡海ありて明兵之勇勢を御見届候処に島津義弘軍勢大利あるに恐て明兵中へ日本の諸軍勢帰朝の難洪有間敷趣家康公に言上ある、家康公御大悦有て重而徳永法印・宮城長次郎兩人を被遣諸軍之帰朝を告無恙纔を解き不残異国を漕出し、追々伏見へ御帰府なり、各家康公へ謁見あり、猶秀吉公の御遺命を受けて重器・黄金御帳面にて下給ひ、然して各国へ退き帰座せられける也、

一、秀吉公為御遺物高虎公へ御腰物大兼・黄金五枚御拝領也、

一、同四年正月十日秀吉公遺命の如く、秀頼公忌明伏見當中より摂州大坂の城に御移徙、五老司・五奉行・三中老・兩後見其外大小名・近習之面々、淀堤陸地を経て其行粧嚴重美麗也、此城に於て諸大名・旗本不殘繼目の御礼其作法次第へ捧物又々嚴重也、此節ハ家康公片桐市正宅二日御滞座、十三日伏見へ御帰座の処、何となく虚説騒動あり、高虎公御一別伏見へ御帰館騒動す、則家康公へ以使者御窺御案内あり、此御、真忠不大方御感也、道中無恙伏見藤森御営宅へ御還着也、

一、秀吉公御他界之後、石田三成謀叛の下意有之、天下騒敷此節ハ、高虎公一筋に家康公へ御奉公可被成と思召、慶長五年二月舍弟藤堂徳正徳後号を江戸へ証人に被遣、御感に思召下総にて為御鷹場三千石の領地を賜也

附太閤様御他界の頃、神君大事の御談合の時ハ、高虎公夜中に御一人被為召、路次口より小笠原一庵手燭を持御迎に出、直二奥へ御通り被成候、此一庵ハ御側に被

召上候也、

一、神君と三成御不和にて、伏見より大坂へ神君御越被成刻、御用心被成候に付、大坂にて高虎公御屋敷四方川にて要害能所ゆへ御心安思召、御借り船二而直に高虎公御屋輔へ三月十一日御移被遊候、一日二日御逗留被遊伏見へ還御被遊候節、御跡より伏見へ御越被成、神君へ昼夜御詰被成候内ハ朝之御入座遊候也、

一、慶長五年上杉景勝謀叛の刻、宇都宮迄家康公二属し御下向被遊、高虎公ハ先陣に御座候処、三成上方に於て逆心の由相聞申候に付、神君の仰に従ひ宇都宮より御上り被遊候砌、七月高虎公小山にて上方よりの注進可仕候間、其一左右次第に御出馬可被遊候様にと神君へ御内証被仰上、藤堂宮内少輔を証人に御残し置被成、夫より御上り被遊候、秀忠公方御腰物拝領也

一、同八月廿二日に、尾州清洲之内六角屋より御立被成萩原之渡り御越被遊、其夜ハ堤に野陣被成、丑之刻斗に御立被遊、岐阜之町口へ朝の五ツ前に御越被遊候処に、先手衆岐阜へ乗被申候に付、高虎公と黒田甲斐守・田中兵部少輔・生駒讀岐守・桑山伊賀守此御衆直に江渡へ御通り被成候へハ、三成人數岐阜後巻として出陣にて御出合河越鉄炮せり合御さ候て、其俣川を御渡し被成候、敵悉く追崩しろくの川端迄追討被遊候夫より右の様子神君大樹へ御注進、池田久兵衛を被遣候、八月廿八日江戸へ相着言上仕候之処、久兵衛を神君御前へ被召出最前小山にて約束の如く、早速注進御感に御思召候、近日御出馬可被遊の旨口上にて申候へと被仰出則久兵衛に黄金一枚被下候、

一、神戸并岐阜御勝利の注進被遊候御返言左の通、

急度申入候、仍而去ル廿二日萩原之渡同おこし(尾張國)

被取越候由、殊に翌日岐阜へ可致相働之由、井伊

兵部(直政)・本多中務(正勝)申越候、尤二存候、其元何様

にも各御相談越度なき様肝要二候、出馬之儀も

無油断候間、可御心安候、猶追々御吉左右待入候、

恐々謹言、

八月廿五日 家康判

藤堂佐渡守殿(高虎)

本多因幡守殿(利久)

生駒讃岐守殿(正)

桑山相模守殿(元精)

岐阜城早々被乗崩御手柄共難申尽候、中納言(徳川秀忠)

先中山道可押上候由、申付候、我等ハ跡より押可申候、

弥羽三左御相談無卒尔様之儀、專一二候、我等

父子を御待ち候ハ、尤二候、恐々謹言、

八月廿七日 家康判

藤堂佐渡守殿(高虎)

黒田甲斐守殿(長政)

田中兵部少輔殿(重政)

秋山右近大夫殿

本田因幡守殿(利久)

加藤左馬之助殿(重明)

神保長三郎殿(相次)

松倉豊後守殿(重政)

生駒讃岐守殿(正)

早々注進祝着之至二候、此度治部少輔罷出候処、

所々二而及一戦、悉被打果候事いさきよき儀、御手

柄共二候、来朔日出馬に相定候、其許無聊爾様に

御分別專一二候、各へも其由可被仰候、恐々謹言、

八月廿八日 家康公印判

藤堂佐渡守殿(高虎)

一、岐阜之儀河土の合戦相済候、已後於赤坂諸大将被存候ハ、

関ヶ原表相働夫より上方へ可責上由、皆々談合被申候へ共、井伊・

本多・高虎公被仰候ハ、神君御着座被遊候迄一戦相待可然と御三人

様諸大將衆へ御申上成候而、其通に相極り候事、

一、神君にハ九月朔日東武御発軍被遊熟田方御書、

今月十日あつた迄越候、明日ハ一宮迄可参候間、

早々御越待存候、恐々謹言、

十日 家康

佐渡殿(高虎)

一、神君九月十四日昼時分赤坂^(美濃國)へ御着座被遊、先手の上方衆ハ其夜青野^(美濃國)ヶ原へ打出野陣御取被成、翌十五日之未明何茂青野ヶ原を御立被成、関ヶ原表へ御出陣なり、高虎公も御出陣の所、藤堂新七郎^(長勝)先手ニ加り朝かけに首を打取出向申候、諸手一番首故神君へ高橋金右衛門^(藤)を以御上ヶ被成候、其後高虎公御鍵先之敵大谷刑部^(大谷)・脇坂中務少輔^(中務)・小川土佐守^(土佐)・平塚因幡^(因幡)此四人に有之候処、中務・土佐・因幡三人ハ高虎公御才覚にて裏切被成候、大谷人数と御一戦あり、大谷の家臣湯浅五助と申母衣の者を藤堂仁右衛門^(高橋)討捕、其外敵数多討捕被成候、藤堂玄蕃^(玄蕃)ハ討死也、其外御家中の士多く討死す、神君之御旗本村越兵庫も此所にて討死也、神君御忠節に思召、御帰陣の後伊予国にて都合式十万三千石ニ被為成候、委細先に記す、

一、秀忠公より御書、

其表之様子上方之趣其外所々被入御念委細

蒙仰、今に不始儀候得共、被入御心候段難申尽存

候、我等事随分急候へ共、路次中切所故、遅々

油断に相似令迷惑候、不任心中候段、可有御察

候、乍去昼夜を不限罷上り候間、近々可令上

着候、就中先書にも雖申入候、今度於濃州表

御手柄之儀、非面上ハ難申尽候、恐々謹言、

九月十四日

秀忠公御印

藤堂佐渡守殿^(高虎)

御返報

一、同年与州今治に城を御築被遊、雜用高虎公御自身の御入用也、
一、同六年^(一六〇二)江戸大都城御縄張被相改、石壁・隄地御造営被仰付候、数月に成功也、

一、同年山州伏見の城廊凶賊之跡殿主・櫓・石壁・隄地已下御造営被仰付、数月に成功也、

一、同年六月江州膳所崎之城地・隄地・土居・堀を構て新に御造営数月に功なる、三ヶ所御普請御勤功の御褒美として家康公より御加恩備中国に於て采地二万石被下、都合式十二万三千石ニ被為成候、此時佐渡守を被改和泉守に被為成候、此節家康公方御自筆にて御返翰被遊候、

尚々しゆもつハ無油断やうしやうかん用二候、^(前物)^(兼七)^(肝)

御書状披見候屋敷普請被成候由尤二候、

委細あさたん其方へ罷越し候、御き、^(後野)^(馬島)

可有候、太夫殿御越候まゝ子細可被申候、

御あい候事いらさる儀二候かと存候、

恐々謹言、

家康

藤和^(藤堂)^(高虎)

一、同八年高次公三歳の時、於伏見初而神君へ謁したまふ、神君御感心あり、国弘の御脇差を賜ふ、^(山城)

一、同十年高虎公御内室様^(大谷)の御事也^(松寿院様)・高次公東武^(武蔵國江戸)へ御引越被成候、

一、同十一年正月家康公・秀忠公へ高次公謁給、両公より拝領物有之、

御内室様にも御目見有之候、御取持ハ堀三右衛門内室也、夫より毎々

佳儀の御祝儀被仰上候、尤江戸へ証人被遣候初也、同十四年諸大名

衆方も証人御下し被成候也、同年秀忠公駿府御宅亭へ入御、御腰物・

時服を賜ふ、

一、同十二年江戸御城廓〔綱張ナラシ〕弘有て此陸地・石壁之御普請被仰付数ヶ月

に成功也、

一、同十三年秀忠公駿府之御宅亭へ入御、此時時服・白銀を賜ふ

此年伊賀・伊

勢とも御入国、

一、同十四年六月丹波国佐々山の城地御見立、新二石壁・陸地御造営

数ヶ月に成功也、上使を以御自筆之御書并御拝領物有之、駿府へも

御書御頂戴也、

いっそや直にも申ことく無油断養生の事肝要に候、火中く、

飛札令祝着候、駿府にて仕合能候由尤事二候、将又

様子之儀念を入被申越候、得其意候、弥丹州へ被越

候由苦勞にて候へ共尤之事二候、猶珍事候ハ、可申越候也、

六月六日 秀忠公御判

藤堂和泉守殿

一、同年佐々山より言上の御返翰、

尚々其元普請念被入候由尤之事二候、炎天之時分苦勞とも二候

書状令祝着候、其元普請七月中可為出来之由

精に入候故二候、其地へも使者為差上候間定而

可為参着候万事辛勞之儀と被察候、尚重而

可申遣候也、

六月十三日 秀忠公御書判

藤堂和泉守殿

一、同所より言上之御返翰、

尚々火中可有候、

書状令祝着候、今度者佐々山普請之儀二付

苦勞共二候、将又伯耆国・淡路之事得其意候、御所

御下り可為候間其刻弥談合誠に念之入申

越候段令満足候也、

六月廿三日 秀忠

藤堂和泉守殿へ

一、佐々山へ駿府へ御越被遊駿府より言上之御返翰、

尚々又上方へ御用之儀なとも候ハ、其よりまつくのほられ

候て尤二候万事苦勞共二候、火中く、

書状令祝着候、召候而其元迄御越候由大儀共

二候、将又伯耆・淡路之事得其意候、御前

御下之刻談合可申候、誠に念之入申越候段令満足候、委細之儀ハ其方被下候刻可申候也、

九月廿九日 秀忠公御書判

藤堂和泉守殿

一、御在津江、

尚々念之入たる事共被申越令祝着候、何も心得申候火中く、書状令祝着候、当年御所御下無之候旨万事

用之儀も多候間、来春にても直々と思召候て、もし駿府へ参度由佐渡を使者に遣候へハ、当年ハ無用之由被仰越候間、春ハ駿府へ可参候、其方も其刻被下候ハ、尤二候、将又福嶋市正事得其意候、誠に念之入申越候段、満足候也、

霜月三日 秀忠

藤堂和泉守殿

一、同十五年丹波国山城殿主其外陸地・石壁以下悉く御自身之御造營数ヶ月ニ成功也、同年駿府にて御宅亭へ神君入御、時服・白銀を賜ふ御供の衆中幸相義利卿・中将頼宣卿・其外老職、御近習之面々なり、御能御饗心種々御丁寧なり、

一、同十六年八月二日高虎公之亭へ神君入御、同年九月廿七日神君高虎公之亭へ入御、御能御饗心種々御丁寧也、御拝領物あり、御相伴の御衆中日野大納言入道唯心・水無瀬一斉・円光寺長光承元金地院

宗伝也、其外御供之衆中前之通翌廿八日為後宴御能有之、御旗本の面々御入来也、

一、同月神君之命令あり、高虎公同十月六日より肥後国へ御越被遊、

数条書付を以加藤忠広之家臣へ示合、尤重臣に誓盟を被仰付国中絵図等御吟味あり、被認調乍序近国九州之国法等の善惡被聞召届、

同十七年正月肥後国熊本より駿府へ御下向被成候処、神君御上洛被遊候而、同月十五日三州吉良御旅館へ伺公被遊候所、則御前へ被為

召右之趣被仰上候処、神君不大方御感悦被遊御時服・白銀等御拝領被遊、神君命に依て夫より直に江戸へ御下被遊、秀忠公へ右之趣御

直ニ被仰上候処、秀忠公も御感悦被遊御時服御拝領被遊候

但し肥州熊本之城主加藤肥後守清正、慶長十六年六月廿四日卒去也、嗣子虎之助忠広幼年なるに依て、国法政事のため高虎に命令あり、時に虎之助十一歳にて、遺領無相連五十四万石被下候也、以後此例を以国大名卒去嗣子幼年なる時ハ、御幕下之衆中より御検使を被遣候事に成申也、

一、駿府方言上之御返翰、

尚々早々念入書状令満足候、

書状令祝着候、駿府へ早々下候由尤之事ニ候、

爰元ヲ廿日ニ必出候間、やかて上候て可申候、廿六日か

廿八日ニハ可有御対面之由、被仰候間、其つもりにて

出候、万事面之時可申候也、

二月十四日 秀忠

藤堂和泉守とのへ

一、同三月廿八日駿府高虎公之亭へ神君入御

御供の衆中数輩あり、御能有く、家士・御小姓左京・花崎左京・相勤る、

一、同四月十五日駿府方江戸へ神君の御用にて御下り被遊、同六月廿六日駿府へ御帰座被遊候、則御機嫌能御首尾也、

一、同七月十八日日野大納言唯心・岩禪寺御前に於て御茶被下、同廿五日南殿に出御、右の衆中高虎公各御前に於て御雑談其外御茶・御料理被下候御家臣之子姓左京(花崎左京)・喜之助も御能相動ル、

一、同月廿八日駿府殿中にて高虎公御能御興行御子姓左京(花崎左京)も相動ル、

一、同十二月廿六日御前に於て御閑談有之候也、

一、同十八年三月五日駿府殿中へ被為召御登城被遊、日野・山名・天台之僧衆も登城也、御能御見物被仰付候也、

一、同月十一日駿府三之丸にて御能御興行、天台之僧衆高虎公隨而出仕見物被遊候也御家臣之子姓喜之助も相動ル、

一、同年七月八日駿府殿中にて御能御興行、高虎公御登城御見物被遊其外御近習衆見物也御家臣小姓左京(花崎左京)・喜之助も相動ル、

一、同年十月廿六日神君武州川越御鷹場御旅館へ高虎公被召寄、密々御閑談あり、同月富田信濃守采地七万石之領地没収御改易、奥州岩城鳥井左京忠政へ被預、此節高虎公江戸へ御暇之時来、国光之御刀国次之御脇指御拝領也、

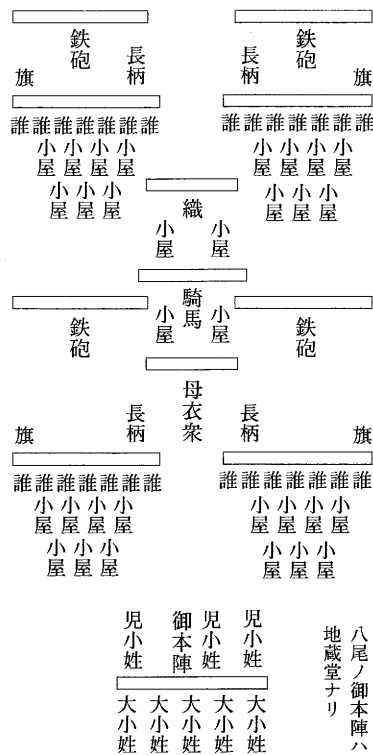
一、同年秀忠公江戸御宅へ入御、御拝領物有之、

一、同十九年九月より日々御登城被遊御密談有之、然而十月二日御密談事済御腰物下坂切刃御拝領被遊夫より御帰宅あり、御家中へも大坂御陣之趣被仰聞候、擬鉄炮・玉菓等御改被遊、翌三日諸手に御構不被成御手廻斗にて御立、鉄炮ハ御跡先へ御供仕候様二との趣、駿府迄参候へと被仰付、駿府へ同五日に御着座、直に御登城被遊中二日御

逗留被遊候内、御前を御退座不被遊、同八日神君より御太刀・時服・白銀御拝領、夫より御発軍、大坂表先鋒大和辺より御攻寄天王寺表青谷口御攻口也、手組ハ遠州・尾州・美濃・伊勢・紀州此人数と一手に可被為攻の旨也、同十一日勢州津に御帰城被遊、勢伊兩國之諸士御揃戦場の御供御留守居等被相定、尤御隠密にて西嶋八兵衛御前に於て相認一通、渡部勘兵衛一通、藤堂仁右衛方へ八兵衛持参仕る也、藤堂宮内少輔豫州今治より騎兵五十・雜兵八百斗召連来り、伊州上野に着、夫より城州淀へ御供大坂表へも御供仕右御書付御隠密二町、西嶋八兵衛之友一人

一、神君之御先手ハ高虎公、秀忠公之御先手井伊直孝也、

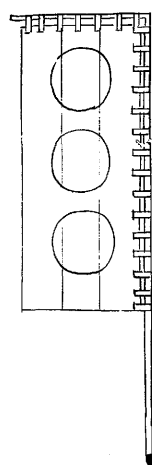
一、高虎公御陣取之図左之通、



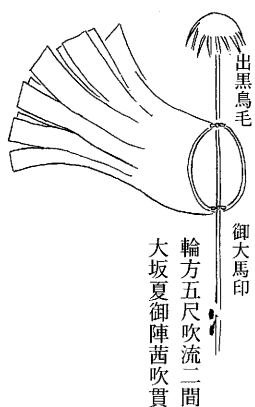
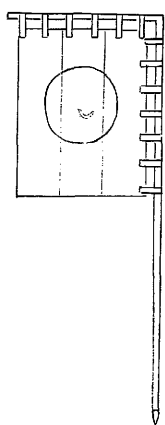
一、高虎公御軍器并御家中指物之図、

御小旗 関原御陣白地三哥掛朱丸三ツ

大坂夏御陣紺地三哥掛白日丸三ツ

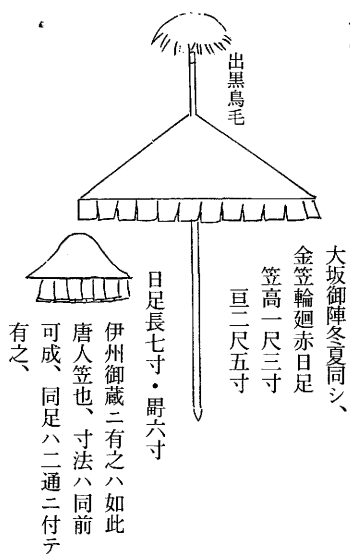


御大馬印 大坂冬御陣白三哥掛大四半朱日丸



出黒鳥毛
御大馬印
輪方五尺吹流二間
大坂夏御陣茜吹貫

御小馬印



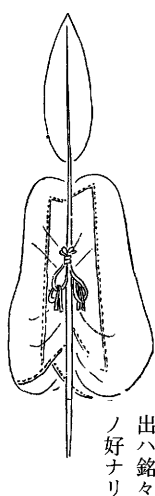
大坂御陣冬夏同シ、
金笠輪廻赤日足
笠高一尺三寸
巨二尺五寸

日足長七寸・罽六寸

伊州御藏ニ有之ハ如此
唐人笠也、寸法ハ同前
可成、同足ハ二通ニ付テ
有之、

御使番

黒母衣 勝立 大坂冬夏御陣黒母衣赤母衣二十
六哥掛 木練黒地



出ハ銘々
ノ好ナリ

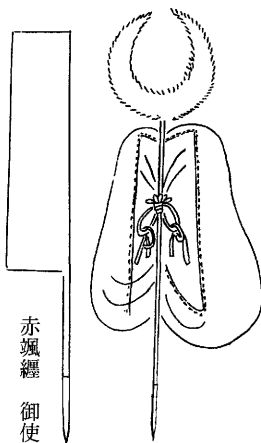
大坂冬陣之時、秀忠公御使番衆黒母衣・赤母衣也、依之住吉表より
天王寺へ御攻寄之時、黒母衣ハ黒颯纏、赤母衣ハ赤颯纏ニ俄ニ被改候
也、



黒颯纏 御使番

赤母衣 御使番 勝立^(歩行)

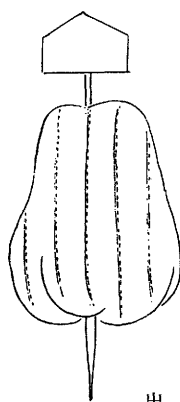
地木練 茜 出面々ノ好



赤魂經 御使番

御使番 赤黒尉交武羅

六尉ノ内上二町赤 両脇四尉黒



出銘々好

大坂夏陣秀忠公御使番衆二相紛ル、ニ依テ、右之通相改ル也、

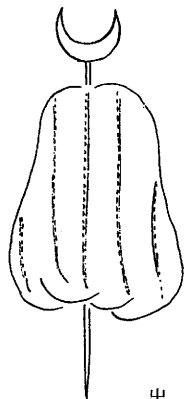
大坂夏御陣番指物



牛之舌金長サ四尺

御使番 黒赤尉交神衣

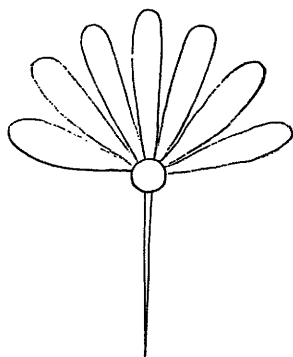
六尉之内上二町黒 両脇四尉赤



出銘々好

御馬所番指物

馬練銀



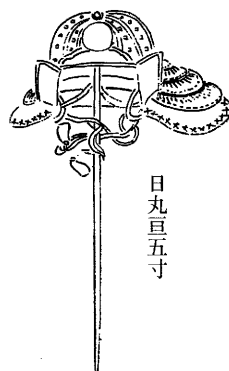
大坂冬御陣御家兵相印

前立物金日の丸也、脇立物

ハ銘々好次第

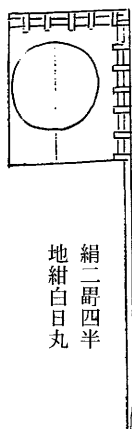
夏御陣に前立無之

銘々好次第



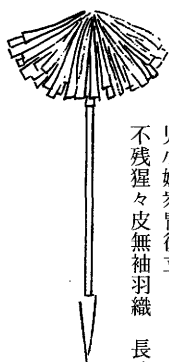
日丸亘五寸

同冬御陣の番指物



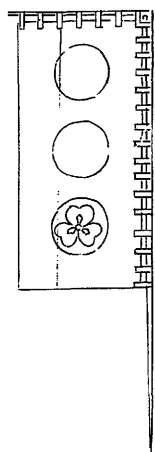
絹二罽四半
地紺白日丸

金切刻



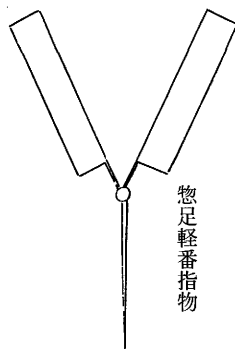
児小姓衆胄後立
不残猩々皮無袖羽織 長サ二尺五寸

御家臣持小旗



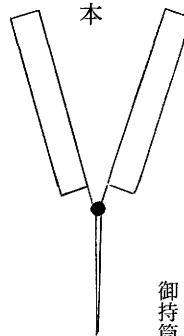
大坂冬夏トモニ為持、絹紺地三罽
白月三ツ之内、下二一ツノ中ニ銘々ノ
紋ヲ付、但シ此持小旗ハ組頭計
ナリ、組衆ノ先ニ立也、

白颯纏二本



惣足輕番指物

白颯纏二本



御持筒
絹地一幅

御家中自分指物の事

一、白蛇袋

藤堂宮内少輔

一、黒鳥毛大月輪

渡辺勘兵衛

大坂冬御陣勘兵衛左魁首、夏御陣にハ息長兵衛ハ相副、依

之武功之指物と蒲黒の冑を長兵衛へこれを譲り、自分ハ豊

島御座に墨にて黒餅を付たるたか釣指物にかゆる也、但し

右の大月輪ハ黒鷄の羽を以て糸緘付たる天衝なり、

一、紺練ののふすま吹貫

藤堂出雲

一、金四手二房

藤堂仁右衛門

関ヶ原御陣に用、大坂御陣にハ黒鷄此趣前立黒鯖尾、

一、白綺白木練

藤堂内匠

一、白丸日脚

出シ黒鳥毛

藤堂采女

一、白颯纏

藤堂式部

一、白御幣

具足白毛緘

藤堂主膳

一、白仏幢

具足白毛緘

藤堂新七郎

一、黒地袋

兜唐冠

藤堂玄蕃

一、白吹貫

出シ黒鳥毛

藤堂右京

一、黒鳥毛

杉為

佐伯権之助

一、白練二甲四半朱丸

釣指物

湯浅右近

一、黒鳥毛二房

藤堂主殿

一、黒綺四本

藤堂勘解由

一、黄颯纏に朱日の丸

小森彦右衛門

一、金早連裏井桁

渡部掃部

一、黒鳥毛三房

一、黒帛輪 出シ金四手

一、紺地にはね題月 練一甲長さ五尺、釣指物二ツ、又黒腰母衣、

一、黒腰母衣

一、白尾花二本つつ

一、黒地二番四半 白井桁

一、黒釣鏡

出シ白熊 彼家にてハ萬國の図と有

一、白釣打出

一、金丸日脚

一、白二番四半朱輪貫

一、白釣地紙

一、黒釣打垂

一、赤颯纏

一、黒鳥毛毛棟下四角金日足

一、白鳥毛一房 出シ白熊

一、白黒段々颯纏

一、白四半手十六房

一、金鎧幅

一、青颯纏

一、黒御幣

一、金三ツ団子

一、切割颯纏 所持ハ釣鏡と有、

一、白七本芭蓮

桑名弥次兵衛

藤堂源助

須知出羽

梅原勝右衛門

梅原頼母・梅原万助・梅原房之助三人同品

白井九兵衛

小川五郎兵衛

長屋若狭

中小路助之進

内海六郎左衛門

落合左近

須知孫左衛門

和田五左衛門

堀田蔵人

吉田貞右衛門

岡本弥一右衛門

野崎内蔵助

菊川源太郎

米村兵太夫

石田三郎左衛門

力石覚右衛門

磯野木工之助

若原一郎左衛門

- 一、紺三罽練の四半白餅に五ツ星
- 一、白二罽四半
- 一、白角取紙
- 一、黒指二罽四半白地目^(註)
- 一、白二罽四半朱餅に朱一文字
指物不、見冬御陣にハ作兵衛病氣にて息与一郎罷出而、夏御陣与一郎も病氣
にて不出、此故にか不見、追て可考、右之儀彼家にて相尋候而書記候也、
- 一、金鍬形
- 一、金月輪
- 一、金昆布
- 一、金燕尾
- 一、白颯纏
- 一、白鳥毛
- 一、金杵
- 一、金团扇飾熊毛
- 一、白御幣二房
- 一、金天銜
- 一、金骸骨
- 一、金丁子の十文字
- 一、金輪脱端廻雁木黒
- 一、黒地字白題月比羅尾乱
- 一、金唐人笠
- 一、金鍬突

- 村井宗兵衛^(成徳)
- 同 瀬兵衛
- 石田宗右衛門
- 鈴木権兵衛
- 藤堂作兵衛^(北光)
- 同 与一郎^(貞孝)
- 赤井悪右衛門^(貞孝)
- 山田甚右衛門
- 飯田権之丞
- 奥山五郎左衛門
- 福永弥五右衛門
- 藤堂孫八郎
- 尾呂志伝兵衛
- 尼子三郎左衛門
- 沢 隼人^(貞徳)
- 長岡弥五兵衛
- 野依一郎右衛門
- 横浜助右衛門
- 進藤三左衛門^(近)
- 彦坂加兵衛
- 藤掛勘十郎
- 多羅尾四郎左衛門^(光南)

- 一、金半月
- 一、金式本角
- 一、金籠日丸
- 一、白地練三罽四半 朱日丸
- 一、金笹葉
- 一、金制札
- 一、金十文字
- 一、白鹿頭二房
- 一、黒月輪鳥毛
- 一、朱蠅取金丸

- 福永少右衛門
- 田中内藏丞^(重久)
- 山岡角兵衛^(貞久)
- 中村源左衛門^(貞久)
- 坂井土佐^(貞徳)
- 堀 伊織^(貞孝)
- 沢田平大夫^(本次)
- 藤堂喜之助^(貞孝)
- 横浜内記^(正孝)
- 野崎新平^(家次)

(以下、次号)

(みえだいがくれきしけんきゅうかいれいかいこもんじよのかい)